

室蘭工業大学と RMIT 大学の国際共修の歴史

大橋 裕子*¹

(原稿受付日 令和 2 年 12 月 11 日 論文受理日 令和 3 年 2 月 17 日)

Footsteps of International Co-learning
between Muroran IT and RMIT

Hiroko OHASHI

(Received 11th December 2020, Accepted 17th February 2021)

Abstract

This paper serves two purposes; 1) outlining the value and potential of language study tours and 2) documenting the footsteps of collaborative co-learning that has been implemented between Muroran Institute of Technology and RMIT university over 20 years. The value of the study tours is discussed with emphasis on intercultural communication in the 21st century, while unwrapping what has been organised and implemented between these two universities in order to provide students with learning opportunities that feed into their ever-changing worldviews.

Keywords: Intercultural learning, co-learning, dual language study tours, student exchange, social activities

1 はじめに

室蘭工業大学（以下室工大）とロイヤル・メルボルン工科大学（以下 RMIT 大）²は、1998 年に両学の間には締結された学術交流協定を軸に、ほぼ毎年双方向短期語学研修を行ってきている。2019 年には、室工大から RMIT 大への英語研修は、通算 21 回、RMIT 大から室工大への日本語研修は、12 回になった。³室工大からの英語研修が開始された当初は RMIT English Worldwide という RMIT 附属語学学校が受け入れ先になっており、日本語学科との交流は、筆者の教える日本語クラスの訪問に留まっていた。しかし、英語学校では、現地の学生との交流が限られていたため、室工大生が研修中、現地の学生と交流をする機会をもっと増やし、また、語学研修の二方向性、相互互惠性を高められるよう、2010 年以降、筆者が所属する日本語科が、室工大からの研修の直接受け入れ先になった。以降、第一週の午前中にある英語の授業を除く学生間の語学・文化交流活動を担当している。それに対して、RMIT 大から室

¹ RMIT 大学グローバル都市社会学部

² オーストラリアの国立大学の一つでメルボルン市街の中心に位置し 8 万 7 千人の学生が在籍。(RMIT Annual Report 2017)。国際学、社会学、環境学、言語学、そして、筆者の属する日本語科は国際関係・社会科学・プランニングの領域に属している。

³ 付録参照

工大への日本語研修は、12回すべて国際交流センターを通して受け入れていただいている。本稿では、まずこの日英二重言語の語学研修の根底にある理念を確認し、双方向語学研修がどう行われてきたかを2010年以降に焦点を当て辿っていく。

2 語学研修の意義 異文化間コミュニケーション学の観点から

近年日豪両国において、グローバル人材の育成の大切さが強調されているが、Kramersch⁽¹⁾が主張しているように、言語運用能力だけでは、21世紀のグローバル社会が直面する問題や摩擦を解決したり、そこに顕在化された宗教、イデオロギー、文化・歴史認識などの差異を乗り越えたりすることが出来ない。外国語で意思の疎通をはかる場合、異文化間で相手の視点から考える能力、また、異文化や異なった価値観を許容する力が必要になる。つまり、グローバル人材には欠かせない言語力は、文法知識、語彙、表現を駆使できる言語力とは質的な違いがあると言える。世界的または客観的な視点にたって考えることが、グローバル人材に必要な資質の一つだとすれば、クリティカル・シンキング（物事を批判的かつ客観的に分析判断する力）は大学教育に望まれる学生の資質である。この意味で、目的言語（室工大生の英語、RMIT大生の日本語）環境で、異文化間コミュニケーションの直接経験の機会を与える語学研修は、単に目的言語が上達するという以上に大きな役割を持つと同時に、自己開発の原動力に繋がる可能性をも秘めていると考えられる。

新しい言語を学ぶということは新しい世界観に出会うことである。RMIT大の学生は室工大でのスタディツアーに行く前に「お世話になります」という新しい表現を学ぶ。この英語の社会で使われることが稀である言葉・表現を学ぶことで、学生は、自分が一人で生きているのではなく他人の‘おかげ’で生かされているという今まで考えたことのない認識に出会う。そして自分というものを省みながら、日本の社会、文化、歴史、伝統の根底に流れているものを知る必要性をも実感する。Diaz and Dasli⁽²⁾が論ずるように、この自覚（クリティカル・シンキング）を持ち、自分のそれまでの‘当たり前’と照らし合わせながら、新しい考え（自分にとって当たり前でないこと）を批判的かつ客観的に認めていく過程を提供することは、現代のグローバル社会が直面する、様々な形の分断、格差の問題について、文化間の境界を越えた対話に積極的に取り組むことができる学生（社会市民）を育成していくことになる。

上の視点から、室工大でのRMIT大学のスタディツアーとRMIT大での室工大英語研修ツアーがどのように計画・実施されてきているのか、この研修の主人公である学生の内省も含めながら、両学の共修の歩みをたどってみる。⁴特に、室工大でのRMIT大学のスタディツアーでは、人とのめぐり逢いに、また、RMIT大での室工大英語研修では、学生間の社会活動に焦点をあて、それぞれ紹介する。それに引き続き、語学研修から派生した両大学の教員レベルでの共修の例も記録する。

3. 室工大でのRMIT大のスタディツアー

3.1 コミュニティに見守られながら思い切って挑戦することを選択する機会 (Take risks in safe hands)

室工大でのRMIT大のスタディツアーに参加する学生は、ほとんどが日本語専科を1年のフルタイムモードで履修していた学生である。スタディツアーはその8か月目ごろに計画され、少数の学生を除いてほとんどの学生には、日本訪問歴はない。8か月前にはひらがなが何かということも、北海道がどこかということもわからなかった学生が飛行機とバスを乗り継いで室工大でのスタディツアーに向かうことは、それ自体かなり勇気がいる。しかも、研修中に行われる日本語の試験や発表だけではなく数々

⁴ 学生の内省はすべて“ ”で示し、筆者の手直しを入れずそのままの声をセクションに沿う形で挿入している。従って、日本語の間違いもそのままである。また、それぞれの学生から、掲載の許可をとっているが、匿名とする。

の‘初めて’の挑戦が待っている。

“じつは、私は室蘭に行く前に不安があって、すごく心配していました。”

年によって異なるが、2018年まで RMIT 大生のために立てていただいた計画は、下のようになっている。

講義：製鉄について・日本語授業・異文化理解

見学：アイヌ民俗博物館・白老ポロトコタン見学・刀鍛冶（伊達・黎明観）・日本製鋼所・室蘭市内

実習：タコ焼き・お好み焼きパーティ・ものづくり（ものづくり基盤センター）

体験：ホームステイ・ホストファミリーとの一日・藍染め体験（伊達・黎明観）・文化の日の行事・温泉旅行・英語講義参加・ビブリオバトル・札幌市内自由活動

学長表敬訪問

歓迎会・送別会

RMIT 大のコースの課題：筆記試験・室蘭研究発表・スタディツアー内省の作文

上からわかるように、12日間のスタディツアーには、バラエティに富んだアクティビティが詰まっている。楽しいアクティビティもあるが、RMIT 大生は、自分が足を踏み入れたことがない領域での挑戦も多い。歓迎パーティを開いていただき、学生がステージでお会いしたばかりのホストファミリーや室工大の先生方の前で日本語で自己紹介をするときの緊張感は、下の学生の作文にも感じられる。不安や危険を感じながら思い切って未知の領域に入っていく時の気持ちである。そういう機会がスタディツアーという教育の場で与えられることは、とても貴重であり、しかも、学生が、一日目から、すでに、‘安全’な場所と感じる室工大コミュニティというだからこそ、思い切ってやってみようとする気持ちが覗かれる。

“パーティーで皆さんのじこしょかいを発表しました。でも、ホームステイの家族とはじめて会いました。私たちは緊張して、あまり食べたくなかったと思いました。”

3.1.1 室工大生のチューター

上のそれぞれのアクティビティ（筆記試験とスタディツアー内省の作文は除く）には、必ず室工大生のチューターがついてくれた。どの活動に、どのチューターがついてくれるかは毎年、到着後にいただくプログラム表に名前前で示されていた。しかし、自分の名前がついてない活動にも「次の授業まで時間がある」、「今日はアルバイトがない」と参加してくれる室工大生がいつも必ずいた。学生にとって、決められた活動に参加することもそうだが、自発的に援助を申し出ることには、もっと勇気が必要なはずである。室工大国際交流センターの先生方から事前に、プログラムが始まる前は、「RMIT 大の学生をお客さんとして扱うより、交流をしてください」というご指導があり、学生間の交流を楽しむ場面も多いはずだが、そうしながらも、いつも RMIT 大生の様子に心配りをしてくれる室工大生から、日本語以外の大事なことを学んでいたようだ。その心配りが、RMIT 大生に、言葉以上に大切なことを教えてくれていた。

“I am crying on the bus. Everyone was crying. We are late 30 minutes, because no one wanted to stop hugging and saying bye to each other. They gave us a card with personalised messages.”

“でも室蘭の人達がおもてなしをくれました。授業があっても、疲れていても、毎日頑張って、私たちにいい経験をくれました。工業大学の学生達とスタッフやホームステイの家族に会って、した経験が絶

対に忘れません。どこに行っても、何をしても、私の人生の最高の経験でした。室蘭で見つけたその人間関係のおかげで、私はいいことをたくさん習えました。”

3.1.2 ホームステイ

国際交流センターが、室工大の中だけではなく大学の外の方々にもホストファミリーとして、RMIT 大の学生の受け入れをお願いしてくださり、広範囲の地域で RMIT 大の学生は国際交流の機会を与えていただいた。室工大コミュニティと地域の方々が善意で受け入れてくださるホームステイは、それがビジネスとして行われているオーストラリアからの学生には、想像しがたい世界だった。

歓迎会でお会いしたホストファミリーのお父さんかお母さんが、ホームステイ一日目に国際交流センターの会議室に迎えに来て下さるのをお待ちする時の緊張の様子は、先生を呼び捨てにしたり、‘you’ と対等な言葉遣いをする普通のオーストラリアの学生からは、全く想像できない。その間、オーストラリアからのお土産を渡すタイミング、せっかく作ってくださったお料理が食べきれない時など、どうすれば失礼にならないのか思い出したように学生間で質問し合うのも毎年見る光景である。「お邪魔します」と言って靴を脱ぐことを何度も忠告されるが、毎年必ず、緊張しすぎて、言葉か、靴のどちらかを忘れる学生がいる。

この日から、学生は、ホームステイのお宅で、日本の生活を始めることになる。若いオーストラリアの学生の3度の食事にいろいろ心配りをいただいたり、ホストファミリーとの一日には、RMIT 大の学生のための活動を考えていただいたりするだけではなく、歓迎会、送別会それから研究発表にも参加してくださっている。RMIT 大生にとって、家族として、初めての日本の‘生活’に両手を広げて迎えていただけること、研修中に終始支えていただけることが、どれほど光栄で幸運なことなのかは、スタディツアー後の内省文からも伝わってくる。

“それでも、日本語を勉強してよかったです。日本語は言葉だけじゃないからです。何かという関係です。これは私のホストファミリーのおかげで習ったことです。私はあまり日本語のたんごを知らないのです、自分の話したかったことをつたえるのがすごく難しかったです。それから住むためにたくさん間違えました。だから初めは私はホストファミリーにめいわくだと思いました。でも、最後の日に、私たちはなみだが出たほど仲良くしました。”

“MY HOST MOTHER CRIED AGAIN AND THE KIDS HUGGED ME GOODBYE. THEY GAVE ME MY CHOPSTICKS AS A FAREWELL PRESENT AS WELL. I THINK WE ALL FEEL THE SAME.”

メルボルンを出る前には、RMIT 大のグローバルオフィスのスタッフを招いたりしながら、出発前のミーティングを5回程行う。安全確認、緊急時の対応、入浴の仕方など日本の家庭でのマナー、スタディツアー中の単位習得のためのテストとその評価方法などについて話し合いを持つ。ツアーリーダーである筆者は、毎年、“You will need to take risks. You will be pushed off the cliff so that you can find your own wings”（皆さんは、崖から突き落とされるような思いをしましょう。でも、その時、自分の翼を見つけられるはずですよ。）とすることにしている。それを言えるのは、その崖は、室蘭にあり、周囲には、室工大のコミュニティの方々がいて、必ず支えてくださるという信頼と確信があるからである。

“Since returning I've noticed that my perspective on life has changed for the better, I hope. The trip was an invaluable opportunity for me, and I've had so many experiences I will not forget for a long time.”

4. RMIT 大での室工大英語研修

4.1 社会活動としての交流

教育の現場では、課外活動を行う場合、現実問題として、その時々 of 学部内の方針、人事によって、援助、協力がどのような形で得られるのかが変わる。筆者が室工大の英語研修を担当し始めた 2010 年から 2019 年までの間も、研修の内容や形式は随時変わってきている。その中で室工大の英語研修と RMIT 大の受入プログラムが両大学の学生に異文化間コミュニケーションを通じた‘社会活動’そのものになるような形式をとってきた。言い換えれば、目的言語を介して学生間の共同活動で問題や困難に遭遇した時、折り合いをつけながら乗り越えていくことである。そのため、下にあげる活動は、「学生の、学生のための、学生による」を根本的なポリシーとし、学部内の状況に応じて実施してきたものである。過去 10 年間の主な活動は下の通りである。

4. 1. 1 バイリンガル合宿 (2010-2014)

2010 年からの 5 年間はメルボルンから、100km ほど離れたクイーンズクリフというグレートオーシャンロードの入り口にある小さい町での相互の教育的メリットを考慮し、日豪混合学生主導型の共同作業を盛り込んだ 2 泊 3 日の合同合宿を行った。合宿の目標は下の通りである。

- To take and/or share responsibility for all aspects of the camp, from planning to completion with your fellow students. (合宿のすべてのことに関する責任を準備段階から最後まで分かち合う)
- To develop life skills through active involvement with the organizational process and responsibility sharing. (合宿の企画実行、責任の分担などに積極的に関わり、実践的スキルを身に付ける)
- Make this valuable experience both worthwhile and fun. (実り多く楽しい経験にする)

このための準備を、言語活動、コミュニケーション活動を念頭に置いたタスクやゲームから、食事の計画までを学生が話し合いで決めた。指導教員が決めたのは、1) 朝のラジオ体操と食後の盆踊りの指導を室工大生に依頼したこと、2) 夕食は一晩目が日本料理、二晩目がオーストラリア料理を作り、3) 料理の鉄人方式のグループ対抗であることの 3 点である。それ以外は、学生に決定権を与え、学生のチャレンジ意識、目的意識、達成感を持たせる方針で、英語を学びたい室工大生と日本語を学んでいる RMIT 大生の両方が二言語を使いながら、社会活動を行う環境作りに務めた。学生たちは時間を争うグループ対抗の食事の準備の時、ガスコンロが壊れたり、バーベキューのガスがなくなったり、思いがけず起きた問題にストレスを感じたり、泣き出しそうになったりしながらもグループでおいしい食事を作るという目標に向かって奮闘した自分たちに、最終的に自信を持つことができたように思う。ある年は、簡単だと思った親子丼ぶりに 2 時間半かかったこともここに記しておく。「一番大変だったことは合宿で、一番楽しかったのも合宿」は、室工大英語研修後のアンケートに一番多い回答である。

“I have gained more confidence within myself and the language that I am learning, and I have come out of my shell a bit more, daring to do more things that I wouldn’t normally do. Since I am a very shy person, the camp has helped a lot.”

4. 1. 2 室工大コミティ (2015-2019)

室工大の単独活動である英語の授業（午前 8 時半から午後 1 時まで）以外の時間は RMIT 大の学生との活動になる。室工大の英語研修を学生主体の社会活動にするため、企画運営を行う RMIT 大生の‘室蘭工大スタディツアーコミティ’が結成される。これは自由意志で応募してきた RMIT 大生、各クラス（レベル 1 を省く）から 2~3 人、計 10~12 人で構成される。研修の受け入れ側であるコミティの発足後、学生間の活動はコミティ主導で、RMIT 大の指導教員は必要に応じてアドバイスや事務・実務的な補助をし、基本的には静観という形をとる。コミティ内の役職も室工大生がメルボルンの到着する前にコミティ内で決められる。

President プレジデント	Deputy President 副プレジデント	Secretary General 事務長官	Minister for Media and Publication メディア大臣
Minister for Safety and Health 安全・保険大臣	Minister for Travel 交通大臣	Minister for Arts & Culture & Coffee 芸術文化コーヒー大臣	Minister for parties 会合大臣

コミティ主導のアクティビティは、室工大生との活動計画・実施、学生間の交流である。共同生活の場を与えられる合宿とは違い、この形式は、共同活動の場を作るところから、学生が担う。室工大生との初めてのミーティングで、メルボルン滞在中に経験したいことを聞き希望リストを作り、室工大生の全体の様子を見ながら、2週間のスケジュールに数々の希望事項を折り込んでいく。希望をもとに計画を立てるため、コミティ主催の遠足やメルボルン観光、BBQと毎年違う活動計画になり、舞台裏でのコミティ同士の話し合い、コミティメンバーの都合、室工大の学生との連絡、メルボルン全体の行事、天気予報など、考慮に入れることは数多い。合宿同様、思い通りにいかないこと、うまくいかないことや同じRMIT大生との話し合いで摩擦が生じそうになることもある。また、室工大生の真意を汲み取れず、苦勞することもあった。そういうハードルを超えながら、室工大生と過ごした時間、お互い間違いのある言語で交わした会話、共有する経験が、かけがえのない経験と思い出になる。

表1 室工大英語研修スケジュール例

■：室工大スタディーツアーコミティが参加 太字：室工大スタディーツアーコミティが担当を決め計画・リード

	Week1	Sat	Sun	Week2	Sat	Sun	Last day at RMIT
Meeting with RMIT staff Meeting with MSC	08:30 - 13:00 English Class	Great Ocean Road day trip	Free with host family/ RMIT friends	-Language exchange session with Full-time Japanese students	コミティ 主催遠足	48th Victoria Japanese Speech Contest	Presentation preparation with RMIT students
	-Welcome Party -Special Lecture: Life in Australia/Australian History and culture -Intercultural communication workshop by RMIT Staff with RMIT students			-Culture Business Practice in Asia (Japan focus) Tutorial attendance		Speech Contest Konshinkai	Presentation and Completion Ceremony (RMIT Staff/ students/) FAREWELL PARTY at FATHER'S Office (\$25/PERSON)
	-RMIT campus walk with MSC -Student lead activities with MSC 室工大 Bucket list to choose activities from *Melbourne Zoo *St-Kilda Beach -State Library of Victoria -Unique food (Sydney road) -Old buildings -Kangaroo meat for BBQ -Eureka Skydeck -Point Nepean National Park -Art Museum			-Teaching Assistance in 14 classes (Japanese 1 ~ Japanese6 all classes)			
				-English Presentation Preparation with help from コミティ			
				-BBQ with RMIT Staff, students, and MSC			

“Being part of the committee sounds easy because it just seems like we just ‘hang out’ with the students. However, it was a great deal of work behind the scenes which involves not only planning but also communication within the committee members and the Murooran students as well.”

“Being a committee member for Kodai students was one of the most memorable and unique experiences of my life.”



図1 メルボルンのマーケットで



図2 公園でのバーベキューの後

“their (室工大生) support at the speech contest that I participated in, really meant a lot to me.

Despite having to present their findings about Australia in English the next day, all eight of them stayed with me until the end and gave me many words of encouragement. I cannot thank them enough for what they have done for me. It may have been a hectic two weeks, but I pulled through and had the time of my life with the committee members and the Muroran students. “

4. 1. 3 室工大生による TA (日本語授業補助) (2015-2019)

RMIT 大での日本語履修数は年によって違うが約 600 である。室工大からの英語研修を迎える学期は週に 15 近くの日本語クラスがある。分担方式で、全クラスに TA として参加する。オーストラリアでは、日本語を使うチャンスがない RMIT 大生にとって、室工大生をクラスに迎えることは、大きな励みになる。同時に、そこでは、オーストラリアで全くの外国語である日本語に挑戦しながら困難に向かっている RMIT 大生の姿を見てもらうことが、室工大生が英語を学ぶときの励みにしてくれる期待もある。室工大生は、複数のレベルのクラスに参加することになるため、教室に入った瞬間、学生のレベルを判断しながら、そこで教える教員の意図をくみ取ることも要求される。下は、室工大生を TA として迎えたある教員の感想である。

“内容もおしえかたのスタイルも違うクラスに参加するという難しい要求に工大生が本当によく答えてくれたと思います。”

4. 1. 4 室工大生による英語研究発表

最後の 1 週間は室工大の学生が TA (4.1.3) に参加しながら、最終日のプレゼンテーションに向けた準備を進めていく。コンピュータールームなどを使って、オーストラリアの経験から、学んだこと、感じたことなどを個々にテーマを決め、インターネットやアンケートなどで調べたことを発表する。準備には、コミティメンバーなど、RMIT 大の学生が英語の補助に入る。この準備期間に RMIT 大生が手伝いに当たる。日本語に苦労している学生だからこそ、共感できる苦悩があり、学生の言葉からわかるように無事に発表を終えたときは、自分のことのように嬉しかったし、室工大生のことが誇らしかったと言っている。

テーマ例：

- Language Learning Differences in Australia and Japan
- Traffic system in Melbourne
- The things I thought about after coming to Melbourne
- Melbourne urban planning
- Immigration in Australia
- Unique ecosystem

“Helping the students with English and their presentations, gave me a sense of achievement and it made me feel so proud when they were able to successfully present in front of committee members, other RMIT students and teachers.”



図 3 修了式



図 4 研究発表

“この英語演習を通して、英語を使い、オーストラリアのことを学び、友達を作りながら、新しいことに挑戦できる自分がいることに気づいた。”



図5 送別会で

5. ムードルを通してのオンライン交流 (2009-2016)

筆者がスタディツアーの引率を始めてから、国際交流センターを通して室工大の先生方に紹介いただいた。その中のエリック・ハグリー先生とは、ムードルを通してのオンライン交流という形で学生間の共修を目指すことになった。これは、ハグリー先生の英語のクラスと筆者の日本語のコースで、**International Communication** と題して両大学の学生間で英語と日本語の同時双方向の日英二重言語によるオンライン語学学習交流である。学生の目標言語のレベルに合わせ週ごとに設定された文化トピックについて学生間でディスカッションをしながら互いの文化についての理解を深め、語学力向上を促していくことが目標とされた。スカイプで学生同士がディスカッションをすることもあった。ここでも学生は語学力、言語知識に留まらず、異文化間コミュニケーションの過程における気づき、気遣い、それから派生する調整の必要性など、身をもって学習する機会を与えられた。ハグリー先生とこのプロジェクトの実践例と教育的示唆を 2014 年にシドニーで行われた日本語教育国際研究大会で共同発表することができたのも、室工大と RMIT 大の共修が教職員レベルでも起きていたことと捉えることができる。

6. スタディツアーのその後

現在、室工大へのスタディツアーに参加した学生のうち、日本で仕事についている者は筆者の知る限りで 6 人である。スタディツアー後に、お世話になったホストファミリーを訪れる者や国際交流センターをオーストラリアの家族を連れて訪れる者など、室蘭で再度お世話になる者も毎年何人かは必ずいる。一方、RMIT 大での研修後、室工大生も卒業旅行、ワーキングホリディにメルボルンを選び、筆者も嬉しい訪問を受けることがよくある。また、1999 年からの 10 年間で 30 人いた室工大からの RMIT 大への交換留学生も受け入れ側の英語の能力に対する条件のハードルが高くなったことで、2009 年以降減ってしまった。しかし、2016 年の室工大の英語研修生が、2018 年に一人交換留学生として、RMIT 大で無事単位を修得したことは、英語研修がきっかけとなり交換留学が息を吹き返す可能性を示しているように思う。語学研修の価値がその後の学生の生き方に意味を残す形で試されるとすれば、研修中の社会活動、国際共修はなお続いていると言っても過言ではない。両大学のつながりの歴史が、共修を益々進化させていくことを心から願う。

また、コロナ禍でオンライン授業を行っている 2020 年は、室工大の先生のご協力のもと、RMIT 大の日本語のクラスに室工大の学生がゲストとして参加してくれていることもここに記録しておく。

“スタディツアーが終わったら、日本に戻ることになります。そこで日本の文化のことを勉強したくて、会えた人のように親切な人になりたいです。”

(この RMIT 生は来年から日本の大学で勉強することが決まっている。)

謝辞

本報告書を作成するにあたり筆者が室工大と RMIT 大の双方向研修に携わり始めてからの 10 年以上の資料を再読した。様々な場面で様々な方のお力をお借りして RMIT 大の学生に将来の自分の在り方を考える機会を与えることが可能になってきていることを改めて実感した。また、筆者自身、教育に携わる者として、引率一年生から現在まで多くのことをご教示いただいた。国際交流室と呼ばれていた頃から、特に室工大の国際交流センターの歴代のスタッフ、教職員の方々には、心から謝意を表す。

文献

- (1) Kramsch, C., From Communicative Competence to Symbolic Competence. *The Modern Language Journal*, 90 (2), 2006, 249-252.
- (2) Diaz, A., & Dasli, M., Tracing the 'critical' trajectory of language and intercultural communication pedagogy. In M. Dasli & A. Diaz (Eds.), *The Critical Turn in Language and Intercultural Communication Pedagogy: Theory, Research and Practice*, 3-21, 2017. London: Routledge.

付録

室蘭工業大学・RMIT 大学学術協定と語学研修 歴史

(日本語の氏名の漢字が不明のため、記述は英語にする)

年	月	
1997	11	Ms. Jill Williams (CELL) and Ms. Emma Goldsworthy (RMIT International) visited Muroran IT to explain the study tour at CELL (former REW) to the staff of the Office of International Affairs, MuroranIT.
1998	3	1st Study Tour at CELL (10 participants)
1998	4	Ms. Lynda Beegle (CELL) and Ms. Emma Goldsworthy (RMIT International) visited Muroran IT to discuss the possibility of sister relationship between RMIT and Muroran IT with President Hiroaki Tagashira.
1998	10	Prof. Kazuhiko Sato, director of the Office of International Affairs, MuroranIT, and Assist. Prof. Kenya Kadosawa visited RMIT and discussed the exchange agreement with Prof. Arun Kumar, Head of Department of Civil and Geological Engineering.
1999	3	2nd Study Tour at CELL (12 participants)
1999	3	Signing ceremony of the "Agreement of Co-operation and Student Exchange between RMIT and MuroranIT". (signed by Prof. David Wilmoth, Deputy Vice-Chancellor, RMIT, and Dr. Tagashira, President, MuroranIT. Assoc. Prof. Koko Kanno and Mr. Isamu Ohara, Director General, MuroranIT, also attended the ceremony.)
2000	3	3rd Study Tour at CELL (10 participants)
2000	3	Prof. Michael Singh, Head of Department, Language and International Studies, RMIT, visited MuroranIT at the invitation of President Tagashira, MuroranIT, and discussed development of the relationship between the two universities with President Tagashira and executive staff members.
2000	10	Mr. Callum Cowell (RMIT International) visited MuroranIT and met Prof. Kazuhiko Sato, Vice-President, MuroranIT, staff of the Office of International Affairs, and participants of the 3rd Study Tour at CELL
2001	3	4th Study Tour at CELL (21 participants)
2002	1	Assoc. Prof. Kanno and Assist. Prof. Kadosawa of the Office of International Affairs, MuroranIT, visited RMIT and discussed the extension of the exchange agreement with the staff of RMIT International and CELL.
2002	3	5th Study Tour at CELL (9 participants)
2002	3	Signing ceremony for the extension of the exchange agreement at RMIT. Prof. Kenichi Matsuoka, Vice-President, MuroranIT, and Prof. Michael Singh, Head of Department, Language and International Studies, RMIT, attended. Assoc. Prof. Kanno and Mr. Hitoshi Kawagishi, Foreign Student Section, MuroranIT, also attended the ceremony.

2002	3	Mr. Atsushi Takagi, Department of Language and International Studies, RMIT, visited MuroranIT at the invitation of President Tagashira, MuroranIT, and discussed promoting future exchange with President Tagashira and executive staff members.
2003	3	6th Study Tour at REW (12 participants)
2003	3	Associate. Prof. Kadosawa of the Office of International Affairs, MuroranIT, stayed at the Department of Language and International Studies, RMIT, as a visiting researcher. (~ Jan.'04)
2004	3	7th Study Tour at REW (20 participants)
2004	5	Ms. Anna Brown, International Development Manager of REW, visited MuroranIT and met President Tagashira and Vice-President Makoto Sasaki and discussed continuation of the study tour at REW.
2004	11	Associate. Prof. Ken Kadosawa of the Office of International Affairs visited REW Bangkok Campus and met with Ms. Anna Brown, International Development Manager of REW and Ms. Uthairat Kokkure, Senior Student Counsellor
2004	11	1st Japanese Study Tour from RMIT at Muroran IT (10 participants)
2005	3	8th Study Tour at REW (14 participants) Associate Professor Kadosawa met Ms. Georgina Douglas and Ms. Barbara White to discuss renewal of the agreement.
2005	3	Renewal agreements of student exchange and Japanese study tour at Muroran IT were signed by President Tagashira Hiroaki and Pro Vice-Chancellor Madeleine Reeve.
2005	9	2nd Japanese Study Tour from RMIT at MuroranIT (8 participants)
2006	3	9th Study Tour at REW (5 participants) Associate Professor Michael Johnson and Ken Kadosawa met Ms. Barbara White and discussed prospective exchange and the Japanese study tour at Muroran IT
2006	9	3rd Japanese Study Tour from RMIT at MuroranIT (8 participants)
2007	5	Ms. Anna Brown, International Development Manager of REW, visited MuroranIT and met Prof. Sakai, Director of Center for international Relations and discuss continuation of the study tour at REW with Michael Johnson and Kenya Kadosawa.
2007		4th Japanese Study Tour from RMIT at MuroranIT (9 participants)
2008	3	10th Study Tour at REW (9 participants)
2008		5th Japanese Study Tour from RMIT at MuroranIT (10 participants)
2009	3	Renewal agreements of student exchange and Japanese study tour at Muroran IT were signed by Dr. Kenichi Matsuoka President, MuroranIT, accompanied by Mr. Takayuki Seike, Vice-President & Director General, Mr. Manabu Yoda, Chief of Budget Office, Accounts Division, Mr. Eric Hagley, Lecturer of English, Common Subject Division
2009		11th Study Tour to RMIT cancelled *No study tours in 2009 due to Swain flue
2010	9	12th Study Tour with Japanese Studies at RMIT (9 participants)
2010	11	6th Japanese Study Tour from RMIT at MuroranIT (10 participants)
2011		13th Study Tour with Japanese Studies at RMIT (7 participants)
2011	11	7th Japanese Study Tour from RMIT at MuroranIT (10 participants)
2012	9	14th Study Tour with Japanese Studies at RMIT (10 participants)
2012	11	8th Japanese Study Tour from RMIT at MuroranIT (8 participants)
2013		15th Study Tour with Japanese Studies at RMIT (10 participants)
2013	11	9th Japanese Study Tour from RMIT at MuroranIT (10 participants)
2014	4	Student Mobility Agreement Partnership renewal between MuroranIT and RMIT
2014	8	16th Study Tour with Japanese Studies at RMIT (9 participants)
2014	10	10th Japanese Study Tour from RMIT at MuroranIT (9 participants)
2015	8	17th Study Tour with Japanese Studies at RMIT (6 participants)
2016	8	18th Study Tour with Japanese Studies at RMIT (8 participants)
2016	10	11th Japanese Study Tour from RMIT at MuroranIT (10 participants)
2017	8	19th Study Tour with Japanese Studies at RMIT (8 participants)
2017	10	12th Japanese Study Tour from RMIT at MuroranIT (9 participants)
2018	8	20th Study Tour with Japanese Studies at RMIT (11 participants)
2018	10	13th Japanese Study Tour from RMIT at MuroranIT (10 participants)
2019	8	21th Study Tour with Japanese Studies at RMIT (15 participants)
2019	9	Student Mobility Agreement Partnership renewal between MuroranIT and RMIT